2016 年度 シラバス

専門演習Ⅰ （社会言語学）

単位数	2
開講時期	前期

授業の目的および概要

言語の社会的特性の探求

社会言語学は、話者が育った文化や社会環境、ことばの使用場面、話者の心理や意図など、ことばの使用に影響を与える様々な要因に光を当てながら、人間の言語能力のダイナミックな特性を解明しようという学問である。
英語圏社会における多様な言語（特に英語の）状況を中心に、言語運用上のバリエーションや変化のしくみを理解し、その原動力となる様々な社会・心理的要因について研究する。英米社会を土台に構築されてきた今日の社会言語学理論を、日本社会における類似の言語事象にあてはめ検証・考察もしていく。さらには、世界中の多くの大学でテキストとして読まれている社会言語学の洋書（入門書）を教科書として、英語や日本語だけでなく世界中の様々な言語・文化に関する豊かな見識を身につける。
2年間のゼミ活動（専門演習I～IV）を通して、以下のような能力の向上を図る。
① 英語を読む力（多読を通して、概要・著者の主張・主張の根拠となる具体的事例などの把握）
② 日本語・英語の両言語でプレゼンテーションおよびディスカッションができる能力
③ 発展的調査（図書館での文献リサーチや言語データ収集のためのフィールドワーク）を通して問題を発見し解決する能力

授業方法

本演習では、2講義を1セットとして展開する。
セットの初回講義は、二人一組によるテキスト内容の分担発表（日本語を使用）。
2回目は、前回の講義で発表されたテキスト内容に関して、二人一組による発展的調査（図書館リサーチまたは言語データ収集のためのフィールドワーク）の成果発表とディスカッションの運営（どちらも英語を使用）。

到達目標

①2年間のゼミ活動を通して、独創性豊かな研究テーマを見つけ、最終的には誰にでも胸を張って自慢できるような卒業研究を仕上げること。大学院レベルに相当する質の高い研究を目指す。
② 与えられたテーマにおける課題の発見、課題解決へ向けての調査・資料収集、資料の整理と分析、研究成果のプレゼンテーション（日本語と英語の両言語で）、課題への解答の総括（学術論文の執筆）など、大学生が卒業前にしっかりと身に付けておくべき「社会人スキル」を磨くこと。
③社会言語学の洋書や英語論文の講読を通して、専門分野における英語のリーディング能力を高めること。
④英語プレゼンテーションや英語ディスカッションを通じて、高度な内容や自分の意見を伝えるための英語のスピーキング能力を高めること。

授業計画

1. オリエンテーション、社会言語学とは
2～3. 言語変異・変化への研究アプローチ
4～5. 言語の社会階層差
6～7. 言語の人種・民族差
8～10. 言語の性差
11～12. 言語人類学
13～14. 言語と文化
15. まとめ

成績評価方法

出席状況、前期末試験、学生発表、クラス討議への貢献度、スーパー英語課題で総合的に評価。なお、学内TOEFL
（8月初旬実施予定）が未受験の場合、単位は認定しない。

準備学習

出された課題を的確に行うこと。発表が当たっていない場合でも、教科書や配布資料をしっかりと読んで講義に臨み、議論に参加できるよう自分の意見をまとめておくこと。

教科書参考書

(教科書:全員必須)プリント教材を使用。
参考文献: :① Bonvillain, N. Language, Culture and Communication. 6th Edition (2011) & 7th Edition (2013). Prentice Hall. ② P. トラッドギル著『言語と社会』岩波書店、③ 日比谷潤子(編著)(2012)『はじめて学ぶ社会言語学』ミネルヴァ書房、④『応用言語学事典』研究社、⑤ Holmes, J., & Hazen, K. (eds.) (2014) Research Methods in Sociolinguistics: A Practical Guide. Wiley Blackwell.

注意事項

授業はテキストを読んできているという前提で進めるので、発表があたっていない学生も毎時間丁寧な予習(テキストの講読)を欠かさぬこと。また、学期末試験があるので、毎時間のテキストの講読は授業の進度に遅れないよう注意すること。
担当者提供の「社会言語学概論」で学習した内容を復習しておくこと。未履修者は、2016年度前期に本ゼミと並行履修をすること。